

蘇る月

志賀 勝

暦制作者

中国の古代思想に「物極まれば反す」という格言があり、古代アラビアの詩人は「物事の真相は反対のものによってあばかれる」と謳った。今日の状況こそまさに、深い傷に悩まされつつひとつの時代の終焉を目撃している時、そしてたとえば、日本の伝統的な生活様式を見直そうといった、これまでと正反対の価値観に目が向けられる時である。新しいものの誕生、産声が切に望まれている時なのである。

今終わろうとしている時代の根本的問題に、時間のセットの間違いがあった。出産が土・日よりも平日に偏っているというのも、陣痛促進剤の使用も、セットされた人為的時間に囚われた時代の産物。私たちは自分のものではない時間に、ちょうどエンデの『モモ』の世界のように、追いついて生きてきた。その時間の組織化、表現である現行のカレンダーの不自然さに、今や多くの人びとが気づきはじめています。

カレンダーというのは、私たちが生きている自然のリズムを知るためにこそ必要不可欠なものである。月のリズムを無視して、どうして私たちの生活が成り立つのだろう。かつて人類は、一日は太陽の巡りで(実は地球の自転)、^{ひと}一月は月の満ち欠け(月の公転)で、そして一年は月と太陽を合わせたリズム(月と地球の公転)で時をとらえてきた。考えるもっとも自然な時間の尺度である。

私はその月と太陽のリズムに基

づいたカレンダー＝「月と季節の暦」を制作して6年目になる。月齢はもとより潮の干満の時刻など月に関する情報を網羅し、二十四節気を季節の節目として重視したカレンダーである。自分の生きてきた時間への疑問から制作を思い立ったものだが、この間、助産婦さんや妊婦さんをはじめ、生命の誕生に関わる人びとに使っていただいたことがうれしいことのひとつだった。というより、カレンダー制作の当初は、まだ狭い問題意識しかなかったのが、その人々の存在によって生命と月の深い関わりを教えられた、といったほうが正確だ。かくて毎年11月3日の「いいおさんの日」には、仕上がり間もないカレンダーを手に、いそいそと売り子に励むのが年課となっている。

ルネッサンスをもじってルナッサンスなどと冗談を飛ばすことがある。ルネッサンスと月は無関係だが、実はことは意外なのであ

る。ご存じのように、月は満ちて、欠ける。つまり、生まれ、成長し、死ぬ。しかしやがて信じたいことが起こる。月は蘇るのである。新月とな

って。月のこの循環が人間の精神にはたらきかけた意義は巨大だったろう、と最近私は思いを馳せている。ルネッサンスと同じく、月はまさに再生であり、蘇りのシンボルだったのである。人間の再生、社会の再生が切望される今、見よ月が、皓々としてそのつきることなき存在をつきつけている。

